



協定調印式における記念撮影(左端は著者の宇都拓洋氏)

科学技術振興機構(JST)の「さくらサイエンスプログラム」の支援により、2025年11月30日から12月6日までの期間、モンゴル薬科学大学の学生7名および引率教員1名を本学に受け入れ、薬用植物資源の研究を基盤とした交流プログラムを実施しました。近年、薬学分野の発展には、国際的な研究連携や人材交流が不可欠となっています。特に各国が有する独自の生物資源や伝統医療の知見を相互に活用することは新たな創薬シーズの探索や持続的な研究体制の構築につながる

日蒙薬学交流

次世代研究者の育成を目指す



宇都 拓洋
(長崎国際大学
薬学部薬学科
薬品資源学研究室教授)

長崎国際大学の活動報告

科学技術振興機構「さくらサイエンスプログラム」友情と感激

II 特別連載 II

第 484 回

プログラムスケジュール	11月30日	来日、福岡空港から佐世保へ移動
	12月1日	市街地散策、オリエンテーション キャンパスツアー、薬学部内施設見学 学術協定調印式
	12月2日	研究体験、附属薬用植物園見学
	12月3日	講義(生薬学Ⅱ)受講、フィールドワーク
	12月4日	研究体験、実習(生薬学実習)参加
	12月5日	修了証授与式、意見交換会 実習(生薬学実習)参加
	12月6日	中富記念くすり博物館見学 太宰府天満宮参拝 福岡空港より帰国

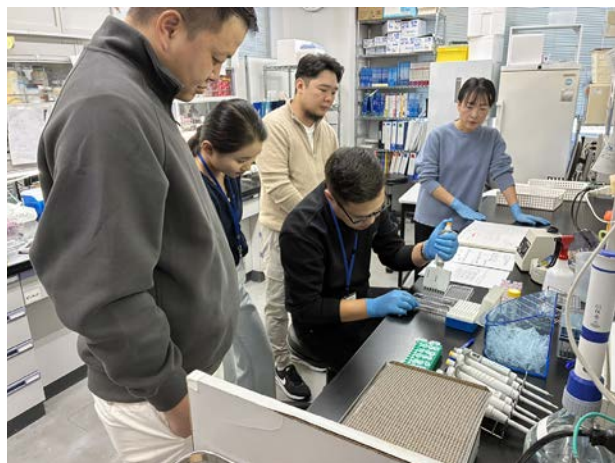
とされています。本学薬学部においても、海外の大学・研究機関との国際共同研究および人材交流を積極的に推進してきました。近年、モンゴルが高まっています。分析技術や研究設備には依然として課題が残されています。そこで、「薬用植物資源を基盤としたモンゴルとの持続的な国際研究交流の構築」をテーマに、教育・研究連携の強化に加え、国際共同研究の基盤形成と次世代研究者の育成を目指し、本プログラムを実施しました。

活動内容

〈教育研究施設見学〉附属図書館や附属薬用植物園などを見学した後、薬学部の教育研究施設を視察しました。大型の学生実習室、模擬薬局や模擬病室はモンゴルでは設置例がほとんどなく、招へい者は高い関心を示していました。また、最新の研究設備についても多くの質問が寄せられました。

〈学術協定調印式〉両大学間の学術・教育交流協定を締結し、今後の学生交流や研究者交流。共同研究の推進に向けた基盤を整備しました。調印式では、招へい者は民族衣装を着用し、国際色豊かで和やかな雰囲気の中で式が進行しました。調印式の様子は、地元テレビ局や新聞社の取材を通じて広く紹介されました。

〈研究体験〉薬用植物由来成分の抽出・分離、分析機器による構造解析、生物活性評価についての説明と研究体験を行いました。一部の



天然物活性評価の研究体験



長崎国際大の学生と「生薬学実習」に取り組む招へい者

実験では招へい者自身が主体的に実験に取り組み、活発な質問やディスカッションが行われました。

〔講義・実習〕薬学部2年生の講義「生薬学Ⅱ」を受講しました。また、「生薬学実習」に参加し、本学学生とともに漢方薬の調製や生薬の鑑別実習に取り組みましたが、当初は互いに緊張した様子も見られましたが、実習を共同で進める中で次第に会話が活発となり、本学学生からモンゴルにおける薬学教育についての質問が寄せられるなど、双方向の交流が深まりました。

〔日本の自然理解〕西海国立公園・九十九島地域においてフィールドワークを実施し、長崎県の自然環境および海洋文化への理解を深めました。九十九島水族館「海きらら」では一般見学に加えバックヤードツアーを行い、飼育現場やクラゲの繁殖設備、浄水システム、標本室などを見学し、日本における海洋生物の飼育・研究の現場を体感しました。

〔日本の医薬の歴史理解〕中富記念くすり博物館を訪問し、日本における医薬の歴史について学びました。生薬標本や伝統的な薬づくりに用いられてきた器具類を見学し、漢方が日本の文化や社会と密接に関わりながら発展してきた過程について理解を深めました。

〔日本文化への触れ合い〕佐世保市街地を散策し、港町として発展してきた地域の歴史や文化について理解を深めました。散策時には佐世保港に大型旅客船が入港しており、内陸国であるモンゴルの招へい者にとって、港に大型客船や自衛隊および米軍の艦船が停泊する光景は日常とは異なるものであったようです。最終日には、太宰府天満宮を参拝し、日本の精神文化に触れる機会となりました。参

拜後には名物の梅ヶ枝餅を味わいました。

〔修了証授与式・意見交換会〕参加者へ修了証が授与され、記念品として季節の花をあしらった有田焼のプレートが贈呈されました。意見交換会では、今後の学生間の交流や共同研究の可能性について活発な意見交換が行われました。

■日蒙双方の学生への効果

修了後のアンケートでは、招へい者全員が非常に高い満足度を示しました。特に印象に残った内容としては、大学および研究施設の見学、実験・研究活動への参加、講義内容、研究・教育設備の充実度、ならびに教員の指導方法が多く挙げられ、日本の高度な科学技術と整備された研究環境が高く評価されました。また、日本の生活様式や食文化、人々の親切さに対しても好意的な意見が多く寄せられました。本学学生にとっても、交流を通してモンゴルの文化や薬学教育の違いを知ることができ、貴重な機会となりました。

■今後の展望

本プログラムを契機としてモンゴル薬科大学との連携を一層深化させ、共同研究体制の構築、学生交流の継続的实施、および教育プログラムの相互発展を図っていきます。現在、具体的な薬用植物に着目した研究テーマの検討が進められており、共同研究開始に向けた準備が進行中です。また、近いうちに本学側の教員がモンゴル薬科大学を訪問し、現地研究環境の視察および研究計画の具体化を行う予定です。